



石ころ



老婆

川崎ゆきお

「見聞を拓げるのはいいが、それが役立つとは限らない」

「そうなんですか」

「様々なことを知っておると、逆に迷いが出る」

「師匠は諸国遍歴で実際にものを多く見られているでしょ」

「見れば見るほど、世の中には様々なものがあることが分かるのだが、それが邪魔する」

「それが役立つのではないのですか」

「まあ、豆知識としては役立つが、実際は別じゃ」

「実践は別なのですか」

「だから、足を引っ張ると言っただろ」

「それは逆なのでは」

「世の中どうとでも言える。これが結論だ」

「つまり、自分の意見というのも、一つの意見にしか過ぎなくなるのですね」

「ハハハ、意見か」

「意見が、何か可笑しいのですか」

「そうではないが、どんな意見も言えるようになる。だから、どれが本当の意見なのかが分からない」

「様々な情報を得ることで、公正な判断が行えるように……」

「その情報とやらを得すぎ、本当に自分はどう思っているのかが分からなくなった」

「大丈夫ですか、師匠」

「困った師匠になったわい」

「妙ですねえ」

「ある村にて老婆を見た」

「あ、はい」

「村から一步も出たことがなく、文字も読めぬ婆さんじゃ」

「はい」

「その婆さん、迷いが無い。わしより悟っておるし、言うこともしっかりしておる。この無学な婆さんの方が、わしより優れておった」

「それは何かの比喩ですか」

「いや、実際に出合った実感論だ」

「どうして、その老婆の方が師匠より優れているのですか」

「知らん」

「え」

「よく分からんが、そう感じてしもうた」

「そんな婆さん、いくらでもいますよ」

「わしより、しっかりしておる。自分の意見がある。生き方の筋道もしっかりしておる。意見以前に、もう出来上がっておるのじゃ。だから、実践がそのまま意見となる」

「師匠、それは難しく考えすぎですよ」

「いや、単純に考えれば、そうなる」

「わしが得た博識など、この老婆の前では薄っぺらい紙のようなものになる」

「面倒なところに入り込みましたねえ、師匠」

「この老婆を越えられぬ。いや、そういう目論見が駄目なのだろうなあ」

「はあ」

「あの老婆は、何も越えようとはせん」

「普通のお婆さんでしょ」

「だから、深刻なのじゃ」

「あの老婆、あらゆる可能性や選択肢など、考えてはおらん。わしが諸国遍歴で訪ねたどの偉人よりも優れておった。道の石ころのように、いくらでもゴロゴロ転がっているのになあ」

「師匠が得たその境地は、どういうものなのですか」

「だから、そういう境地云々以前のところのものなのだ」

「あ、はい」

「これは、越えられぬ。わしは遠くまで来てしまい過ぎた」

「はいはい」

「なんだその相槌は」

「そんな石ころのような老婆が最上位だとすると、弟子の私達はどうなります」

「そうだな」

「言わなかったことにしてください。私にも弟子がいます。その弟子にも弟子がいます」

「ああ、そうじゃな」

「そうして下さい」

「はいはい」

了